

Bluff Archives Monthly News

2019年6月

発行 NPO 法人横浜山手アーカイブス

『フク・ホロヴァーの生涯を追って』

表題の書籍は、吉澤脛子著 2002年に草思社から刊行された日本女性の一代記である。詳しい内容は本書に譲るが、フクが暮らした山手 247番の写真が、数枚掲載されている。また、吉澤氏が探し出されたご子孫の手元には、フクの横浜山手での写真が大切に残されている。



山手 247番の家 (©Diana Lumisdaine)

フクは、1886年生まれ、和歌山県出身、大阪ガスの技師カレル・ヤン・ホラと1906年に大阪で結婚し、1908年2月～1913年まで横浜に暮らした。ブラフディレクトリによると1909～10年に247番地に、1912～13年に61-A番にMrs.K.J.Horaという表記で確認できる。子どもは長女のワカと長男のチャーリーの二人である。

ホラはオーストリア国籍のチェコ人である。ドイツ人建築家デ・ランデの招きで来日、原爆ドームとして残る広島県物産陳列館を設計した建築家ヤン・レツルと1909年「レツル・アンド・ホラ事務所」を構えた。事務所は山下町13番地と東京銀座出雲町にあった。1911年5月25日付の新聞『日本』土木建築号には「●外人の請負業・・・(中略) 工事の請負までするのは同事務所を以て嚆矢とすべきであろう」と記事※にある。ホラは、同事務所で建築施工を担当する一方、ボヘミア製ウリル・クレメント車の販売も行っていった。左の写真に写る2台の車である。外国製自動車の販売は好調であったと思われるが、同事務所は1913年に解散し、ホラー家は上海に渡る。

フクは、外国人と結婚、横浜ではミセス・ホラとして洋館に暮らし、最後は異国の地で生涯を終えた。横浜山手での写真は幸福そうな笑顔の写真ばかりである。写真からは、当時の暮らし(建物、家具、服装、自動車、使用人、庭園、ペットなど)の様子が生き生きと伝わってくる。

これらの貴重な写真は、著者である吉澤脛子氏が、フクが暮らした山手を調査に訪れ、彼女の痕跡を探して奇しくも同地番にある“山手資料館”を訪ねられたことに端を発する。“山手資料館”ではその情報を受け止め、吉澤氏のご厚意で、著書にまつわるさらなる資料をご提供いただいた。このようなご縁が、地域の歴史資料の発掘に繋がっていることを、改めて記録に留めておきたい。様々な分野の調査や研究によって、山手の暮らしの一旦が明らかになるのは、我々にとっても地域にとっても宝となろう。(S)

<主な参考文献>

『フク・ホロヴァーの生涯を追って』草思社 2002年

『日本の美術 447 外国人建築家の系譜』至文堂 2003年

※『ヤン・レツル再考』広島市公文書館紀要 2012年